

# Bunryō Volunteers 2011



# contents

- 3 文教ボランティアズの活動 ▶ 菊池 充
- 5 相模原市での物資の仕分け・搬入 ▶ 海和 光誠
- 5 被災地での泥だし・がれきの撤去 ▶ 佐藤 夕夏
- 7 中学生との勉強会 ▶ 高取 千鶴
- 10 活動：よみがえれ！大川中学校
- 11 茅ヶ崎復興支援チャリティイベント ▶ 菊池 充
- 12 港清掃・漁具回収 ▶ 外山 大
- 13 活動：尾崎／牡鹿半島／鹿立浜
- 14 雄勝硯の回収作業 ▶ 瀬谷 佳奈美
- 14 仮設住宅での足湯活動 ▶ 菊池 充
- 15 思い出の品の清掃 ▶ 秋間 俊介
- 16 南三陸町での炊き出し ▶ 鈴木 杏美
- 18 活動：南三陸町
- 19 交流会 in 茅ヶ崎・鎌倉・横浜 ▶ 松本 佳奈
- 21 会計報告書
- 22 文教ボランティアズ 2011 活動参加者一覧

# 文教ボランティアズの活動

文教ボランティアズ代表 国際学部3年 菊池充

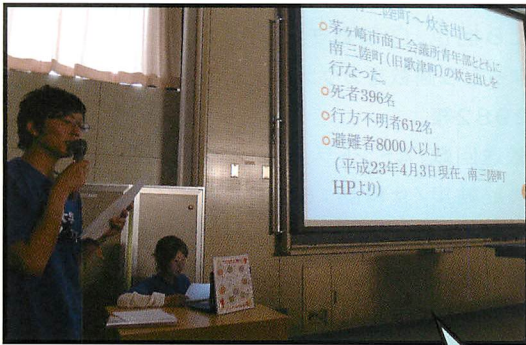
## 文教ボランティアズとは

文教ボランティアズは2001年に発足し、今年で11年目となりました。世界各地の紛争地での戦後復興などでの支援活動を行ってきました。2011年3月11日、東日本大震災が日本を襲いました。震災発生直後から直ちに行動を起こし、募金活動を展開しました。また4月初めから9月までの半年間、被害の大きかった石巻市で文教大学生約100人が泥出しなどの復興活動に参加しました。活動の軌跡、詳細についてぜひこの報告をご覧ください。

## 文教ボランティアズの活動の意義

3月31日、ボランティアズの先発隊が初めて被災地、石巻市に入り、津波の被害の大きさ、惨状にたちまち圧倒されました。本当にここが日本であることが信じられませんでした。石巻市ではこれまでもつながりのあった緊急支援 NGO である JEN の活動に参加することを考えていました。しかし JEN の代表のご好意で、日本財団や RQ 市民災害救援センターという NGO を紹介されました。私たちが学生であることから、石巻市でも子供たちの大きな被害の出た大川小学校の位置する河北町での活動を勧めてくれました。石巻市河北町、福地林業者生活改善センターが「河北ボランティアセンター」となり、物資配布の拠点、ボランティアの受け入れや派遣、また宿泊・生活の場となりました。作業中や休憩時間に住民が親族の心配や将来の心配、近隣の大川小学校の話をしてくれましたが、目の前の悲劇、多くの人が亡くなっているという厳しい現実を身をもって感じました。8月、9月となると、泥出しや瓦礫の撤去のほかに、思い出の品の洗浄、仮設住宅での足湯などの支援を行いました。物理的な支援だけでなく精神的な面での支援も加わっていました。近くの体育館で、流れた被災者の思い出の品、写真やランドセル、学校用品といった大切な品を一つ一つ手作業できれいにし、お返しする。機械では出来ない作業であり、被災者の一人一人の思いを大切に、丁寧に作業を行いました。このような現場に立ち、住民に寄り添い真に心を開き活動するということは机の上での勉強からは学ぶことの出来ない貴重な機会となりました。河北町での活動では継続的な活動が可能だったために、地域の人々との出会いが生まれました。現地出会った人々、RQ 市民災害救援センター、日本財団には本当にお世話になりました。本当にありがとうございました。また、学内報告会や写真展へ足を運んでいただいた大橋ゆか子学長、被災者支援活動の現地を視察いただいた渡辺孝理事長、そして活動資金を含む多くの支援を寄せてくださった文教大学教職員の皆様に心からお礼を申し上げます。

## 東日本大震災支援活動報告会(前期・後期)



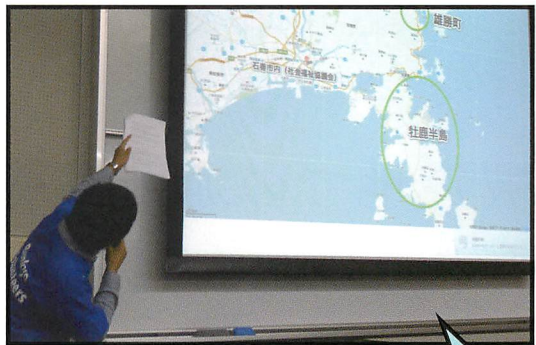
前期の報告会では、各陣に分かれての報告を行った。



9月28日に、半年間に及ぶボランティアの活動報告会が開かれた。



マッドバスターズと呼ばれる、泥だしの服装を紹介。



地図や写真を用いて、実際の状況やボランティアズの活動をわかりやすく発表した。



前期・後期ともに多くの学生が、報告会に足を運んでくれた。

# 相模原市での 物資の仕分け・搬入

国際学部 3年 海和光誠

依頼者/相模原市地域福祉課、男女共同参画課  
日時/2011年3月27日～4月2日～4日  
場所/相模原市体育館  
概要/岩手県大船渡市は姉妹都市、宇宙開発都市である「銀河連邦」として友好・災害協定を結んでいる。市民からの支援物資の受け入れ、法人向け物資募集、義援金、避難者受け入れを実施。被災地で受け入れる際の負担を最小限にす

るために、すべて新品もしくは未開封のもののみを取り扱う。

内容/①受付：受け入れ表の項目欄に市民からの提供物資をチェックし、市の礼状を渡す。②仕分け：物資を段ボール箱に仕分け。満杯になったら梱包。③個数チェック：段ボールが満杯になったら個数をカウントし、分配所に移動する。計2982箱。

搬送回数/4トントラックで22回(25台)

最終結果/食料品：653箱、紙おむつ：814箱  
感想/実際に被災地を訪れ、住民の方々が送られてきた物資を選んでる姿を見た際に、改めて分かりやすい仕分けの重要性を感じた。そこにある物資が相模原市からのものでないにせよ、送る前の状況と、それが実際に被災地の方々の手に渡っている姿の両方を見ることが出来たことはとても貴重な体験になった。

# 被災地での泥だし・ がれきの撤去

国際学部 3年 佐藤夕夏

石巻市河北町の谷地地区、尾崎地区で泥だし作業を行った。床板を剥ぎ、その下に流れ込んだ泥をスコップでかき出す。泥の中にはワラや草が大量に混じっており、水を含んでいるためとても重く、思うように泥をかき出すことができない。また泥の中には人の体に有害となる物質が含まれているため、嚴重な装備が必要になる。粉塵を吸い込むのを防ぎ、悪臭をカバーするためのマスクと、泥から皮膚を守るゴム手袋、長靴は欠かせない。3月下旬～6月は、谷地地区での泥かきが中心となった。まず、民家にお邪魔し、津波で濡れてしまった家財道具を家の外に運び出す。その家に

住む家族にとっては思い入れのあるものばかりだ。濡れてしまっているもの、まだ使えるもの、もう使うことができないものに分類し、心を込めて運び出した。その家のお子さんが今まで読んでいた漫画や本も処分せざるを得なかった。今まで大切にしてきたのだろうな、と思うと胸が痛んだ。家財道具をすべて運び出すと、床板を剥ぎ、その下に溜まった泥をスコップでかき出す。泥は固く、なかなかスコップが刺さらず、根気のいる作業だった。スコップではとりづらい所は手でかき出した。すべて



石巻市の谷地での泥だし。まず家財道具を外に出し、そして家の中の泥だしをした。



津波の被害を受けた家の床下に入り込んでしまった泥を取り除くためにバールなどを用いて床板をはがした。

出し終わった時に、「助かりました、本当にありがとう。」という家主さんの言葉に胸が熱くなった。6月下旬からは、尾崎地区での泥だしが始まった。尾崎は、橋が津波で流されたが、自衛隊によって再度橋が架けられ、ボランティアの手がまったく入っていない地区だった。そのため、震災直後の様子がそのまま残っていた。震災から約4カ月が経ったこの地区での泥だしは、腐敗による悪臭との戦いだった。日本財団と合同で作業し、総勢約100人でのがれき撤去、泥だし作業では、チームワークが特に要求された。尾崎は、満潮になると道路が冠水してしまうため、朝～満潮までの時間

が勝負だった。現場に着くとみな集中し、作業をおこなった。民宿を営むご主人は、「ボランティアさんがきれいにしてくれたおかげで、民宿を再開する希望がみえた。絶対に、再開させたい」と語ってくれた。ボランティアのわたしたちを暖かく迎えてくれ、気丈に振る舞ってくれる現地の方々の姿に、復興に向けた一歩を感じることができた。まだまだ、泥だしを必要としている地域がたくさんある。復興には地域差があると改めて感じた。泥だしをすることで、そこに住む方々の希望を少しでも取り戻せたら、と強く願っている。



石巻市・谷地の民家での泥だし。この家主の方は被害の少なかった二階で暮らしている。



家のまわりに堆積した泥は、運びやすくするために土嚢袋に入れて、別の所へ運ぶ。



石巻ボランティアセンター「マッドマスターズ」と呼ばれた泥出し部隊に参加。市街地の復興のための泥出し、清掃に総力をあげた。

## 中学生との勉強会

国際学部 2年 高取千鶴

夜の勉強会が始まったのは、ある中学生の女の子の一言からでした。「せっかく大学生が来ているのだから勉強を教えてよ」と。そして夜の勉強会が始まりました。それは4月のはじめでしたが、以後ずっと続いています。教える科目は中学生によって様々。長期休みの宿題をやる子もいれば、受験勉強、好きな科目をとことんやる子もいます。しかし、勉強会の目的は「勉強を教える」ことではありません。夜に集まって「みんなで過ごす」という

ことが大切なことでした。というのも、勉強が始まった当初は震災から間もない頃。夜になると心細くなってしまふ、思い出してしまうということで、みんなで集まり、楽しく過ごすことで、少しでも「安心」出来るように、リラックス出来るように、という思いで行っていました。恋バナをしたり、歌を歌ったり、夏はみんなで花火をすることもありました。ま



ボランティアセンターに集まる中学生にバルーンアートを教えてもらった。

た、反対に中学生がダンスを踊ってくれたことや、バルーンアートを教えてくれたこともありました。たった一時間ちょっとの短い時間ですが、笑いの絶えない時間でした。ある一人の親御さんがこんな話をしてくれました。「あの子たちも泣きたいはずなのに、私たち親の心配をし、励ましてくれる。きっと家で我慢している分、文教の皆さんの前で笑ったり、遊んだりすることで発散しているのだと思う。ありがとう」。またある時、一人の女の子が中学校の弁論大会で読む作文を読ませてくれたことがありました。そこには、「最初は、自分の故郷でも知っている土地でもないこの大川に、なぜこんなにたくさんのボランティアさんが来てくれるのだろうと思った。しかし、ボランティアの皆が、大川地区の片付けだけでなく、暗闇の中にいた私たちをも救ってくれた」とありました。私たちはただの大学生で、心理のプロでもなければ、本当の意味で彼女たちの苦しみを分かってあげることも出来ないのかもしれませんが、何が出来るかといえば、本当に、勉強をしたり、お話をしたり、遊んだり、寄り添うことくらいです。しかし、この作文を読んだとき、本当に少しだけでも彼女たちの支えになれたのだと分かり、嬉しかったです。中学生の皆は、いつも笑顔で明るく、震災のことを考えさせないほどで、逆にいつも私たちが元気をもらっていました。1週間ごとに大学生のお兄さん、お姉さんが入れ替わりやってくるという異例の状態の中で、彼女

たちは私たち一人一人をちゃんと覚え、とても大切にしてくれました。福地に行く度に、中学生のみんなが「お帰りなさい。会いたかったです」と言ってくれることは、私をボランティアに向かわせる一つの大きな原動力になっていたようにも思います。「ありがとう」と感謝するのは、きっと私たち大学生のほうだと思います。勉強会をしていた福地の公民館には、中学生が作った「文教BOX」というものがあります。そこには1～16陣までの文教生の名前が書いてあります。そして私たちの文教大学のボランティア室には、中学生が書いてくれた何枚もの色紙や寄せ書きが貼ってあります。また福地に行ったときは笑顔で彼女たちに「たがいま」と言いたいです。



地域の子供たちとの交流。みんな、文教大学生との交流を楽しみにしてくれた。



夜の勉強会。中学生たちは苦手な教科、得意な教科にそれぞれが頑張った。





泥だらけになった作業着も自ら洗濯。一日でも作業をすれば全身泥だらけになった。



泥出し作業に励むボランティアたちのために、おにぎりをにぎるのも重要な仕事。



ボランティアセンターの全体ミーティング後、文教生だけで再度ミーティング、明日の予定などを確認した。



ボランティアセンターとなっている福地林業センターの花壇はボランティアの方の提案で作られた。夏にはヒマワリが力強く咲いた。



中学生たちとのふれあい。彼らにとっても、私たちにとっても大切な時間だ。



河北町ボランティアセンター近所の子供たちとはすぐに仲良くなれた。



1日の作業が終わった後、子供たちと一緒に遊んだ。作業で疲れた体も子供たちの笑顔で癒された。



第2陣最終日、ボランティアセンターにいつも遊びに来ていた中学生たちから感謝の色紙を頂いた。

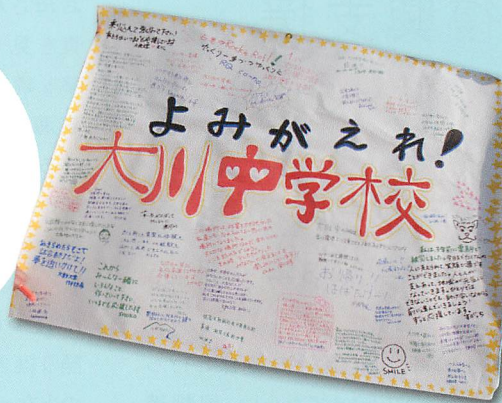


大川中学校の体育館。3.11の大津波はまさに卒業式後の出来事だった。



卒業式後の体育館が無残な姿に…。卒業式が行われた後の体育館に流れ込んだ体育用具と汚泥。

活動



3月11日。その日、大川中学校では卒業式が行われていました。



大川中学校の教室内の泥だし。



地震から約1か月後。体育館から流れ出す泥の海。



大川中学校の先生方に、みんなで作った寄せ書きを渡した。



ボランティアメンバーと学校の先生方。



3月11日に発生した東日本大震災の被災地への復興支援を目的としたチャリティーイベントが6月4日、5日に茅ヶ崎中央公園で開催された。茅ヶ崎市内のお店や東北地方のお店も参加した。

## 茅ヶ崎復興支援 チャリティーイベント

国際学部 3年 菊池 充

このイベントは茅ヶ崎商工会議所の皆様と行った。被災地の現状について知ってもらい、風評被害のある福島県の自治体を招待して物を買うことで支援しようという目的である。6月4日のチャリティーイベント当日には、風評被害の大きかった福島県や岩手などの東北地方から多くの出店があった。私たち文教ボランティアは、写真展として石巻市での活動の写真を約100枚を展示すると共に、会場内での募金活動を行った。多くの市民の皆様が熱心に写真を見て、私たちに現地の様子や作業について聞いてくださった。身内の被災の経験を1時間以上話してくれた方や、「応援しているよ」と言ってくださった方々。子どもたちが熱心に写真を見ている姿も印象的だった。



被災地の写真を市民の方々が興味をもって見ている。

お母さんやお父さん方も小さい子どもたちに写真を見せ、津波の恐怖について語りかけていた。茅ヶ崎市は海のとてもきれいな所である。しかし東海地震もいつ起こるかわからないと言われていた。募金活動をしたときの反応や今回のイベントでも熱心に見入っている様子を見ると、市民の多くが危機意識を持ち、人ごとではない、何かなくては、と考えているのだと感じた。震災から日が経つにつれ、記憶は薄れていくかもしれない。語り継ぎや忘れないということが非常に重要なものとなっていこう。



チャリティーイベントで、文教ボランティアは南三陸町への募金活動も行った。



小さな子どもから大人まで画用紙に被災地に寄せるメッセージを書いていた。

# 港清掃・漁具回収

国際学部 2年 外山 大

私たちが活動をした牡鹿半島は宮城県の北東部に位置し、3月11日の地震で最大級の被害を受けた地域の一つである。この地震で、陸地は東南東に5.3m移動し、1.2m沈下した。牡鹿半島には狐崎浜、竹浜、牧浜、福貴浦浜、鹿立浜の5つの漁港があり、牡蠣の養殖をはじめ、漁業で成り立っていた。しかし、津波によって漁船・漁業用の網・牡蠣の種付けで使うホタテの貝殻・浮きなどが一面に散乱していた。その光景はとても衝撃的で、まるで日本ではないような錯覚を受けてしまった。多くの人が働いていたであろう、牡蠣の加工場が廃墟となっていた。津波でさらわれたガレキや、網などが港に漂着していたのでそれらの回収をするチーム、被害を受けた漁師さんの自宅のへ

ドロやガレキの撤去をするチームに分かれ、同時進行で作業を行った。海に近いだけあってヘドロの量が多く、一日では作業が終わらなかったため高圧洗浄機を用いたり、縁の下にもぐり、直接、ヘドロを取り出すこともあった。真夏の作業であったが、釘の踏みぬきなどで怪我をすると、破傷風になる危険があったので、長袖・長ズボンの雨具、ゴム手袋、マスク、ヘルメットなどの装備をしなければならず、皆、汗だくになりながら作業を行った。漁具回収では辺り一面に散らばった浮き・網・貝殻・錨など、漁業に必要なものを指定の場所に集め、漁師さんの指示でもう一度使えそうなものとしてないものに分ける作業を行った。しかし、その資材の量がとても多く、こちらも一日では作業が終わらなかった。作業はRQ市民災害救援センターの方々、日本財団の方々と共同で行い、外国人部隊もいた。満潮時間があったため、過ぎると道路が冠水してしまい帰れなくなってしまうので、作業時間に限りがあり満足のいく作業ができなかった。また、5つある漁港の一つの鹿立浜では、自立支援の一環で住民に農業をしてもらおうと畑を、子どもたちには遊んでもらおうと公園をつくった。活用してもらえれば幸いだ。



地震前の道に復旧させるために、道路に積みもって固くなった砂利と泥の除去作業。重機を入れるためには、まず人の力で道をつくる。ほかのボランティア団体の方々と一緒に100人近い人数での道づくり作業だった。



津波によって道路に打ち上げられた漁船をみんなで運び、堤防を乗り越えさせて川に戻した。



津波によって壊され、流されたものの中には目を疑うようなものもあった。

活動

# 尾崎 牡鹿半島 鹿立浜



近くの荻浜中学校で行われた運動会に参加させてもらった。中学生は今回の震災で引っ越しなどして全校生徒が20人もいなかった。



お世話になっているRQ河北ボランティアセンターの方々をはじめとし、ほかのボランティアの方々も玉投げや綱引きなどの競技を中学生と一緒に楽しんだ。



近くの仮設住宅に避難しているお年寄りたちのために小さい畑を作った。丸太で地面を囲い、中に土を入れて耕し、周りにネットを張った。



野生のシカの侵入を防ぐために扉をつけた。これもボランティアのアイデア。



瓦礫を再利用して看板を製作。元気の出るような明るいメッセージや「段差に注意」といった看板は牡鹿半島のさまざまな道に立てられた。



津波の被害を受けた家の中を掃除し、壁紙を張り替えて、もう一度その家に住めるようにした。

## 雄勝硯の回収作業 (雄勝町)

国際学部 2年 瀬谷佳奈美

私たちが活動を行った雄勝町は、日本でも有数の硯の名産地である。中でも雄勝硯は、室町時代初期からの長い歴史を持つ伝統工芸品として有名だ。この雄勝町は、津波による重大な被害を受けた町のひとつである。伝統産業会館の近くにあるインフォメーションセンターの屋上には観光バスが打ち上げられており、この光景はあまりにも衝撃的で新聞やニュースでも取り上げられたほどであった。私たちは伝統産業会館に埋まった硯を拾い集め、ヘドロを落とし、トラックに乗せて町役場へ運ぶという作業を丸一日行った。この活動はRQ市民災害救援センターの方々と協力して行い、総勢30人ほどが集まった。伝統産業会館には、展示されていたり壁面に使われたりしていた硯があたり一面に広がっていた。拾い集める際は、埋まっている硯や釘を踏まないように、またヘドロを落とす際も硯に傷をつけないよう一つ一つ丁寧に、細心の注意が必要となった。また、硯は大変重く、それをいくつも集めるというのはかなり体力を使う作業であった。埋まっている硯の大きさや形、重さも様々で、ひょうたん型をしたものや中には最大で500kgほどのものもあった。この500kgの硯は日本最大級のものであるそうで、機械を使いながら慎重にヘドロから引き上げられた。回収した硯はトラックに乗せ、少し離れた町役場まで運んだ。移動中は、あまりにも衝撃的な景色に皆息をのんだ。そこには津波によって半壊もしくは全壊した家々が立ち並び、その近くにはあまりにも穏やかな海が広がっていた。また流された木材等が散乱し、車はガラスにひびが入り、いたるところが窪んでひっくり返っていた。林のとても高いところには靴や袋がぶら下がっており、いかに津波が高かったのかを物語っていた。メディアでしか見たことのなかった景色を実際に

目の当たりにし、その悲惨さや被災した方々のことを考えると言葉を失った。誰も言葉にはしなかったが、同じ感情を抱いていたことであろう。町役場へ着くと、その硯を4階まで運んで種類別に並べた。この作業は、精神的にも肉体的にも辛いものであった。私たちは皆、長袖・長ズボンの上に雨具を着ており、ヘルメットとゴーグル、マスク、手袋、長靴を装着しているため、汗だくになりながらの作業であった。4階までの階段は果てしなく長く感じ、それを何往復もすることは気の遠くなるような思いであった。しかし、誰一人として弱音を吐く人はいなかった。それは、皆がお互いに協力し、支え合い励まし合っていたからである。雄勝硯の回収作業は決して楽なものではなかったが、皆が同じ想いで一つになり、協力し合ったからこそできたのだと思う。作業をやりきったときの達成感は何となく計り知れないものであった。

## 仮設住宅での 足湯活動

国際学部 3年 菊池 充

復旧から復興へと向かい始め、被災者の仮設住宅への入居が始まった。石巻市内でも各地で仮設住宅が出来始めていた。仮設住宅というのは一カ所集中的に作られ、もともと自分の住んでいた地域とは別の地域の住民同士が非常に近い距離で暮らしている。また壁が薄く、精神的にも気を使いながら生活をしている。知らない人々との暮らしの中で、お互いのコミュニケーションがうまく出来なかったり、外出や外で子どもを遊ばせたりするということが難しい。そのような状態から、家に引きこもりがちになったり、何もすることがなく気力がなくなってしまうりする。仮設住宅での

生活が長期になるにつれ、孤独死や将来への絶望から自殺をしてしまうということが問題となってくるだろう。そこで仮設住宅を訪問し足湯を行う。大きな洗面器にお湯を張り、足を浸けてもらいリラックスしてもらう。その後お話をしながら手のひらや腕を揉みほぐす。違う集落から集まった人々の自治会を形成するというのも重要な目的である。また住民間のコミュニケーションを深め、相互の助け合いのシステムを作り出したり、孤独死を防いざたりと行ったことも目的の一つである。仮設住宅に入居できたことに対する感謝の気持ちが大きく、



仮設住宅では昼間家族が仕事に出て、おばあちゃんが1人であることも少なくない。足湯に来てもらって、集まった人とお茶をすることで、周りとのコミュニケーションをとってもらうことも一つの目的。

「もっとこうしてほしい」というような細かな要望が言い辛いという現状がある。足湯の際に「つぶやき」を隠れたニーズとして社会福祉協議会へ報告する。そしてそのニーズをまた仮設住宅での生活改善へと還元していく。実際に「隙間風があって寒いよねえ」や「もっと(机などの)生活用具が欲しい」といったつぶやきがあり、これらを次の段階の支援へとつなげていく。住民と行政のつなぎ役としてのボランティアのあり方である。



仮設住宅で足湯を行う前に、一度ボランティア達で練習を行うことで、どこが気持ちいいかなどを知ることができる。実際に足湯を行う時は、つぶやきからニーズを拾うため、リラックスしてもらうことを心がけた。

## 思い出の品の 清掃

国際学部 2年 秋間俊介

私は今年の8月の20日から26日まで東日本大震災の被災地である宮城県石巻市に行かせて頂き、ボランティア活動をさせていただいた。一週



作業が始まる前には、必ず全員で今日の作業についての説明を聞いてから、取り掛かった。

間々の期間であったが、いくつかの現場を訪れ様々な活動をした。尾崎での泥出しや雄勝町での漁具の回収など、活動は多岐にわたった。私はその中でも、津波によって汚れてしまった写真やアルバムなどの思い出の品の洗浄作業について報告する。主な活動内容は、写真は腐食が中程度のもはスポンジで洗い、ドライヤーを使って乾かす。またほとんど腐食が進んでいないものは水で洗って、そのまま干して乾燥させるというもの。この作業では、写真自体を傷つけないように表面を指でこすりながら汚れを落とすこともあった。また、重なったまま流されてしまった写真を一枚ずつはがしていく作業も行った。これは写真をはがしやすくするための液体に浸した後に、一枚ずつ写真を傷つけないようにはがしていく作業だった。その中にはとてもはがしづらいものもあり、強くはがそうすると写真を破ってしまう恐れがあったので大変苦労した。写真の他にもポストカードや手帳、アルバムなども扱った。写真と違い、水にぬれると傷んでしまうようなものは雑巾や



作業場の体育館には、津波によって泥を被ったたくさんの思い出の品が並べられた。



写真、本、小物、大きなものと、種類を分けて、その種類にあったそれぞれの清掃の仕方に従い、作業を進めた。



写真の清掃過程の一つ。濡れた布で軽く汚れをふき取った後に、ドライヤーを使って乾かしている様子。



たくさんの洗濯バサミは、外で最後の洗浄が終わった写真を種類ごとに分けて乾かすために使われる。

歯ブラシなどを使って泥を落としていった。私たちが作業した体育館では、洗浄した思い出の品を持ち主が取りに来てわかるように保管していた。その横で作業することは身が引き締まる思いで、以前の生活を写した写真を見て現在の状況を考えると胸を打つものがあった。この作業の過程で、私は日記帳やその土地の生活を写した写真集、手紙などを洗浄させていただいた。この品の持ち主は無事なのだろうか、ということを考えながら作業を進めるうちに震災の被害の甚大さを改めて実感した。私が被災地を訪れた時は、震災発生から約5カ月が経過していた。しかし、予想していたほど復興は進んでおらずボランティア活動の重要性を感じた。これから復興はもっと進んでいくと思うが、何よりも被災者の心の支援も大切だと思う。その点で、今回の思い出の品の清掃作業が被災者の方々の支えの一部になれば幸いである。

## 南三陸町での炊き出し

国際学部 3年 鈴木杏美

4月23日、24日と中村恭一教授と学生6名は茅ヶ崎市商工会議所青年部の方々と共に、宮城県南三陸町の避難所「平成の森」にて炊き出し活動を行いました。南三陸町は宮城県北東部に位置し、太平洋に面した町の沿岸部にはリアス式海岸特有の美しい景観が広がる、牡蠣やわかめなどの日本有数の養殖漁業地でした。しかし、3月11日に発生した東日本大震災の地震に伴う津波によって市街地の浸水率は48%、海岸から3km内陸まで津波が押し寄せ、町は甚大な被害を受けただけでなく、多くの尊い命も奪われまし





今回炊き出しを行った南三陸町「平成の森」。野外活動センターが避難所となっており、たくさんの人が避難生活を送っていた。水道が復旧していなかったため、トイレの水は流れなかった。

た。私たちは炊き出し活動を行う前に、被害の大きかった沿岸部の視察と避難所の「ベイサイドアリーナ」を訪れました。連日のテレビや新聞等の報道で被災地の様子を「町が消えた」、「壊滅的」という表現が使用されていましたが、実際に目にした被害状況はあまりにも衝撃的で言葉になりませんでした。あたりに残っているのは建物の骨組みや土台、そして道路わきに寄せられた瓦礫の山でした。町中に転がる漁船や3階建てのアパートの上に車がのっている光景を目の当たりにして、改めて今回の津波の威力というものを感じました。南三陸町最大の避難所であった「ベイサイドアリーナ」には約1000人の方々が避難をされていました。入口のすぐ近くにまでも段ボールの仕切りを使って生活をしていらっしゃるのですが、仕切りの段ボールは低く、雨風からの寒さをしのげるのか、またプライバシーを保つことが難しいのではと感じました。「平成の森」にて行われた炊き出し活動は避難されている約300人の方々にソースかつ丼や山菜そば・うどんなどを用意し、提供させていただきました。炊き出しのメニューとしては珍しいメニューだったようで、避難所の方々にも喜んでいただき、笑顔を見ることができました。また配膳時に地震当時の様子のお話を

聞かせていただいたり、必要な物資のニーズを調査したり、小学生くらいの男の子が支援物資で支給されたお菓子をボランティアの皆さんにと持ってきてくれたりと、避難者の方々とコミュニケーションを取ることもできました。ピーク時には町全体で10000人の避難者がいたとされていましたが、8月末には南三陸町内すべての避難所を閉鎖、人々は仮設住宅等へ入居し、新しい環境での生活を始めています。実際に町の現状を見て、復旧・復興、そして町の再構築には長期的な支援が必要であると実感しました。これからも私たちのできる範囲での支援を継続的に行っていきたくと思っています。



南三陸町の佐藤仁町長(右)に、南三陸町の復興を願って、街頭募金で集めた100万円を寄託した。厳しい状況でありながらも、しっかりと前を見据えて復興への強い思いを語っておられた。

活動

# がんばろう! 南三陸

## 南三陸町



茅ヶ崎商工会議所青年部と協力して朝食づくり。一人暮らしをする文教ボランティアメンバーは、料理はお手の物。



朝食用に300人分のスクランブルエッグを調理。これにコンソメスープ、ソーセージ、パン。「いつもより少しは優雅な朝食を」と。

中村先生も大活躍。そばやうどんを被災者のみなさんに配る姿が印象的だった。



昼食用の山菜うどんに入れるネギを必死で切る。少しでもおいしいものを食べてもらうため、トッピングにも手を抜かない。



吹き出し初日の夕食メニューはカツ丼。ご飯の上に干切りキャベツをのせ、揚げたてのソースカツをのせた。

## 交流会 in 茅ヶ崎・鎌倉・横浜

国際学部 3年 松本佳奈

2011年10月14日～16日の日程で、石巻市福地で出会った6人の中学生を湘南に招き、文教大学の見学と湘南観光、交流会を行いました。夜行バスに乗るのも初めての中学生たちは、行く前からドキドキワクワクした様子でした。出発の時には、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、みんなで仙台に向かうバス停まで見送りに来てくれました。「気をつけて！みんな、あっちに行った

ら標準語をしゃべるんだよ～」。別れる時、お母さんたちは子ども達とハグをし、子ども達は少し恥ずかしがりながら、「行ってきます」と言っていました。みんな笑っていました。でも私は少し泣きそうでした。福地の保護者の方々は、安全なはずの、そしてあんな近くの小学校で、大切な、大切なお子さんを亡くしました。まだ半年しか経っていないこの時期に、中学生の子ども達を親御さんの元から離していいのだろうかとは悩みました。子ども達を迎えにいて、親御さんに見送ってもらってから、常に「絶対安全に笑顔でこの子たちを福地に帰さなければ」という気持ちでいました。そして、今まで私たちが行ってお世話になってばかりだった福地の中学生に、最高の経験をさせてあげたいと心から思いました。江の島の海鮮丼、高台から見る景色、江ノ電から見る景色や鎌倉の大仏…6人にとって見るもの全てが新鮮だったのか、みんなの

# 石巻の中学生



石巻の中学生を文教大学のキャンパスに招待し、学内を見て回った。初めて訪れる大学にみんな目を輝かせていた。



みなとみらいにて記念撮影。中学生たちは大きな帆船に驚いていた。

目はキラキラしていて、笑顔でした。その夜、茅ヶ崎で行われた食事会には今まで現地で活動した30数名の文教生が集まりました。子ども達は現地に行った私たち一人一人をちゃんと覚えてくれています。そして私たちも子ども達を忘れたことはありません。大学生にとっても、きっと、中学生にとっても、楽しく素敵な時間となりました。無事、福地に中学生達を送り届けた夜、中学生のご両親とお話することができました。お父さんが「こんなに近くで子どもが亡くなってしまったから、親達は子どもが少し遠くに行くのも心配。でもいつまでもこのままではいけないから、今回の旅行は親達にとってもいい経験だった」と話してくださいました。そして中学生達は、「また絶対来るからね！来年の夏休みに来ようかな～」と話していました。この計画が無事実行できたのも、3月より福地地区でお世話していただいた地域のみなさんやRQのみな

さん、そして私たちの活動を支えてくださった先生方のおかげだと思います。中学生の女の子が、「こんなに濃くて、一瞬一瞬が最高すぎる二日間を過ごしたのは初めてです。こんな経験もう一生できないですよ」と話していました。私は、彼女たちのこれからの人生に、もっともっと"最高すぎる"時間がたくさん待っていると思います。私たちの関係は、これで終わりではありません。これからもよろしくね、と6人の中学生に伝えたいです。



キャンパス内を歩きながら紹介した。

## 文教の大学生



赤レンガ倉庫にて。休憩中も笑顔が絶えなかった。



食事会にて。中学生たちは文教生たちとの再会にとっても喜んでいた。

# < 文教ボランティアズ >

## 会計報告書

3月11日の東日本大震災発生直後、私たち文教ボランティアズがまず行ったのは大学の最寄り駅である湘南台駅と茅ヶ崎駅での街頭募金であった。以来9月までの7カ月間に及び、10月の聳塔祭(大学祭)でも私たちは救援支援募金活動を行った。私たち学生を通じて東北の被災者のためにという多くの市民の皆様の温かい思いが多額の募金という形で寄せられた。私たちの募金は、現地で復興支援活動に奮闘する NGO 団体や関係者に直接活用されるように寄託した。「迅速かつ確実に被災地の方々へ支援が届く」といった意味では、私たちの募金活動は被災者だけでなく、協力していただいた市民の皆様にも大きな意味のある支援だったと思う。その募金総額はおよそ510万円にも及んだ。

国際緊急支援 NGO「アドラジャパン」	80 万円
国際救援支援 NGO「JEN」	80 万円
災害救援 NGO「RQ 市民災害救援センター」	110 万円
茅ヶ崎市商工会議所青年部「復興チャリティ実行委員会」	80 万円
南三陸町「佐藤仁町長」	100 万円
宮城県石巻市立大川中学校	50 万円
大川中学校被災生徒を励ます湘南への招待活動の一部	10 万円

計 510 万円

文教ボランティアズは3月31日から9月下旬まで、宮城県石巻市河北町のボランティアセンターを拠点に総勢100人を超す学生を5日～7日間の日程で順次現地へと派遣し、復旧支援活動を行った。先発調査隊、南三陸支援、及び17陣(2011年11月末現在)の現地派遣隊の総活動費(旅費支援として計170万円)は、文教大学教職員、同窓会、教員・学生の家族、卒業生の皆様から寄せられたボランティアズ活動支援金で賄われた。また寝袋、ヘルメット、ヘッドランプなどの活動用装備の大半(40万円相当)は国際学部国際ボランティア委員会によって支給された。冬休み、春休みには現地活動を再開する予定で、現地入りする学生の旅費支援は続けられる見込みとなっている。



# 文教ボランティアズ2011

## 活動参加者（敬称略・順不同）

### 4年

樋惇紀/石川結麻/青木佳奈子/青木久恵/有原可奈/濱野瑠香/柴野綾香/太田和温子/小林一宏  
松野春菜/矢口翠/吉田紀子/植田圭介/関口綾子/外川洪/川島麻奈美/根元雅史/美山佑介  
羽田英峻/金子美和/阿部梨沙/入澤和恵/高畑明江/小玉恵里奈/小林美穂/犬飼香奈/沢島彰花  
内田萌奈美/成沢和/牛渡香菜/皆川貴広/橋本修人/大向真可/塩田和也/日岐敏史 他

### 3年

菊池充/松本佳奈/佐藤夕夏/斎藤愛/蟻坂舞/向井信朗/木村愛花/古渡みゆき/鈴木杏美  
大内亜津美/須田陽果/海和光誠/瀬谷ちあき/早川さおり/種田有真/木田三香子/岩渕舞  
太田菜美子/山形泉/関谷賢明/菊次智/野中俊介/山下高史/阿部みのり/柴山絵里加/植竹美由紀  
大藤恭子/角田佳奈恵/久保田浩貴/平山比都美/本間萌美/小宮寛子/柳澤萌子/小笠原有紀  
五十畑春歌/小島なつみ/岸本夏季/富岡恵美/田辺めぐみ/依田明日香/相原千夏/斎藤由佳  
庄條美那/松若志保/白澤早紀/近藤健/松澤隆治 他

### 2年

外山大/高取千鶴/石原濟世/関谷雅人/瀬谷佳奈美/秋間俊亮/庄口かすみ/小沼竜士/竹村太希  
中山菜津子/石毛宏幸/北林修平/小野百合江/菊池有宇/鈴木啓大/阿部義徳/伊藤理沙/星田翔子  
金野奈緒子/岩田健新/後藤祐嘉/村越真弓/細岡祐太/坪内明美/羽地千尋/齋藤美希/神成友美  
羽田野由衣/堂田瑞葉/鈴木純平/前嶋祥子 他

### 1年

窪田圭佑/小林裕樹/大平紗彩/真坂卓志/福土海/石井仁之/堀川健太郎/川手裕美子/木村允美  
岸野くるみ/佐藤結真/本間千秋/鈴木真蒔/土屋瑠南/河野りさ子/中村麻梨奈/神山明子/大木祥  
石川愛/長谷川紗希/庭屋貴史/高橋千笑/高田典花/佐々木理緒/椛澤美緒/奥田悟/久我玄紀  
田中朱美/木村圭祐/三浦理香/今津妙子/岩田理沙/工藤ゆり/小林鈴奈/久木山真吾/矢島聖  
廣田有輝/村上紘寿美/関沙弥香/八田凧砂/江川ひかり/町田晃章/田中美奈/長谷川瞳/米岡茉穂  
松野華奈/竹内しおり/鶴見実紀/宮崎ちひろ/森本周吾/キムジュンファン/鈴木梨沙/女部田沙紀  
猪野達弥/長谷川梓/川口沙希/塚本彩香/菅野久美/柴崎淳子/小山みさと/赤名麻衣/船場美桂  
千木良彩華/関郁美/柳谷栞/樺澤美緒/松野華奈/新津かなえ/伊藤桃美/山本眞子/津谷英里  
土屋詩穂里/三戸亜里紗/前澤美帆/大島夏海/藤崎いづみ/須貝眞美子/矢野倫世/桜井伸也  
矢島恵美/青木陽香/岡峻輔/坂本真由美/秋山久美/宮本由/長谷川瞳/山本奏恵/小方謙吾  
月田ミチル/水越匡海/坂本裕貴/田島冴香/齊藤夏葵/久我玄紀/江口裕 他

### 卒業生

柳恵莉子/依田志子

ご協力ありがとうございました。

## 2011年度文教大学広報大賞 受賞



震災被災者支援活動が広くマスコミで紹介されたことにより、文教ボランティアズは2011年度文教大学広報大賞を受賞した。



## The Bunkyo Volunteers 2011

2012年1月20日 発行

編集・発行 文教大学国際学部・国際ボランティア委員会  
〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100番地  
TEL:0467-53-2111

デザイン 株式会社 CREATIVE MIND

印刷・製本 株式会社 精美堂